

博士（経済学）竹本 洋氏の『経済学

体系の創成——ジェイムズ・ステュアート

ト研究——』に対する授賞審査要旨

本書は、久しく埋もれていた経済学史上の巨編であるSir James Steuart, "An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy" (2 vols., London, 1767) [以下「原理」]の詳細な研究である。経済学史についての従来の通説では、斯学のおもな創始者はW. Petty, R. Cantillon, F. Quesnayらであり、その体系的建設者はA. Smithであるとされてきた。しかしSmithの『国富論』に九年先立って刊行された、Smithとおなじスコットランド人Steuartの『原理』が、その重厚で整備された体系性と独自で高水準の理論内容とによって、『国富論』と並べて経済科学創成の書と呼ぶべき業績であるとする認識が、近来、世界の経済学史の学界で定着しつつある。これまでに『原理』が埋もれてきたのは、その著者の長い亡命生活にもとづいてEuro-centricな特徴を示す本書が、久しくイギリスならびに古典学派の支配のもとに置かれてきた経済学の陰の部分に入っていたからであった。しかしこんには、『国富論』に『原理』を並置させ、この両古典の理論的相互補完をこのころみることに需要

と貨幣流通との、また経済的自由対統制の問題をめぐって、大きな意義をもつと考えられるに至っている。

竹本氏は、同氏が中心となつて完成した、長年（一九八八—一九九八年）にわたる『原理』の邦訳・校注・解題の業をつうじて、この龐大で難解な古典を隈なく精査し、その結果をこんにちの問題意識と研究水準とに立ちつつはば過不足なく編成して、周到かつ新鮮な、『原理』体系の総括的研究の成果を提供するに至った。これが氏の労作『経済学体系の創成』（A5版、三五〇頁、名古屋大学出版会、一九九五年）であつて、近来の経済学史の國際的学界におけるきわめて注目すべき収穫である。本書によつて氏は、社会「哲学」の領域に科学としての経済学を創出しようとした、一八世紀啓蒙人Steuartの「*l'homme*」を見据えつつ、ここ半世紀にわたる『原理』研究史に大きい里程標を打ち立てたといえよう。

本書は七章から成り、序章「ポリティカル・エコノミーの近代的定立」と終章「ポリティカル・エコノミーの思想空間」との二つのユニークな立論を挿んで、『原理』全五編（Bk. I, Of Population and Agriculture; Bk. II, Of Trade and Industry; Bk. III, Of Money and Coin; Bk. IV, Of Credit and Debts; Bk. V, Of Taxes）の展開をそれに即して再編成する五つの章を含んでいる。これら各章での分析と叙述とはいずれも検討と整理との行きとどいたものであるが、とくに

第二章「均り合いの理論」は詳細にわたり、原典Bk. IIの示す、一方での均衡 (equilibrium) の理論と他方での不均衡 (overturning of balance) の理論との結合という成果に目をとどかせて、価値論・就業論・外国貿易論・経済発展段階論から、短期と長期、物価と貨幣量、階級と身分、自由と統制、富および階級構成の循環、等々の諸論点に至るまでを綿密に取扱ひ、理論的に不偏の立場を保ちながら、「原理」を学史上に定置することに成功している。とくに、従来重商主義的だとして陳腐視されがちであったこのBk. IIの後半部分からも、改めて新鮮さが蘇らされた。

ただし、「原理」の最大の特徴と、この古典を『国富論』に對置させるべき諸点の主眼とは、要するに貨幣的理論体系というその性質に存するのであつて、竹本氏の慎重なベンはこの点の強調を抑制しすぎたようにも思われるが、氏自身によるBk. III以下の分析は、おのずからこの抑制を解いている。なお氏による第三・第四章は、かならずしも「原理」自身のおこなつた歴史的・制度的な対象への詳細きわまる分析—イギリスの鑄貨事情、1717のシステム、フランスの財政、等についての—を追つてはいないが、これらの部分はいかにちではむしる歴史的研究にとって意義をもつものである点を考えれば、妥当な扱い方であろう。また、「原理」Bk. IV, Bk. VはSteuart自身の「流通」(circulation) の理論の展開であるが、

そのなかでの銀行論 (Bk. IV) の中核的部分に對する竹本氏の理解 (第四章第三節) はとくに透徹している。

一八〇五年に至つて刊行されたSteuartの“Works” (London) は六卷から成り、「原理」はそのvol. I-IVを占めてゐる。残るvol. V-VIの内容は雑多であるが、それらの分析と解明、およびそれらと「原理」とのかかわりの全面的検討は、多くのSteuart研究者にとつてと同様に、竹本氏にとつてもまた今後の課題として残されている。

竹本氏の当面の労作は、氏自身の表現によれば、経済学史研究上にいたずらに異説を立てようとするのではなく、「経済学の（正史）において不当に軽視ないし無視されてきた……人物に公正な光をあて、最初のポリテイカル・エコノミストとして彼 (Steuart) を復位させよう」と念願しつつ成つたものであつた。現在では「原理」の含む諸論点の理解をめぐつて論争も少なくないが、氏は本書ではそれらをも努めて簡潔・平明に整理し、自著のふところの深さを示している。なお付言すれば、氏のこの研究は、『原理』の邦訳の上巻（一九九八年、名古屋大学出版会）に添えられた、氏自身による、Steuartの詳細で最新の伝記等によつて補完されている。

以上のように、竹本洋氏の『経済学体系の創成』は、経済学史・経済思想史研究上の顕著な業績を成し、斯学の國際的水準をも高める成果であり、学士院賞にふさわしい労作であると認められる。